

要約

江戸幕府の歴史編纂事業に関する研究 ―創業史の分析を中心に―

平野 仁也

本研究は、近世日本において、江戸幕府が行った歴史編纂事業について、その実態の解明を目的とするものである。

序章では、まず本稿が考察の対象とする「江戸幕府の歴史編纂事業」について定義するとともに、その概略を記した。ついで、本稿が武家の創業の歴史を編纂する行為に着目して研究する旨を述べ、創業史を編纂する行為が当時武家社会においていかなる意味を有したかを論じた。本研究の意義は、①戦国史研究への寄与、②近世人に対する理解の深化、の2点にあり、特に②を重視して研究に取り組んだことを述べた。関係する先行研究として、柴田実・福井保・山本武夫・高橋章則・小宮木代良・藤實久美子の業績を挙げた。先行研究の問題点として、①歴史編纂事業の相互の関係についての分析が欠落していること、②編纂過程における関係する人・組織の動向に関する考察が不十分であることを述べた。研究を進展させるため、本稿では、①先行する書物との関係、②同時代史料を用いた編纂過程の分析、③創業史が有する特性への理解、以上3つの研究上の視点を設定した。

第1章では、『寛永諸家系図伝』（以下『寛永系図』と略す）編纂事業の実態を解明するため、幕府の編纂関係者と諸家とのやりとりに着目し、武家の系図作成・提出という行為に内在する性質について考察した。第1章第1節では、幕府から諸家へ出された命ならびに福岡藩黒田家の動向について分析した。第1章第2節では、萩藩毛利家の事例を取り上げ、「公儀所日乗」「福岡彦右衛門覚書」「遠藤卞左物語覚」を用いて、同家と幕府とのやりとりを検討した。第1章第3節では、本姓の問題に関する編纂関係者と諸家とのやりとりについて考察し、加賀藩前田家の事例ならびに道春のおかれた状況について考えた。以上、第1章の考察を通じて、系図作成、上位権力への提出という行為が、武家社会における政治的状況等を反映しながら、関係する人物間の双方向的なやりとりの中で行われていく様子を明らかにした。

第2章では、『寛永系図』の編纂過程において、諸家の提出系図（呈譜）がどのように改変され、最終稿ができあがったか、その実態について考察した。第2章第1節では、一次史料を中心に編纂の進行過程を明らかにし、ついで編纂作業の規準を示す史料を挙げて、

その内容について検討した。第2章第2節では、『寛永系図』の未定稿と位置づけることが可能である「岡谷本」（東京大学史料編纂所蔵）について言及し、その特徴について述べた。また、呈譜には和文体のものがあり、それらが漢文体の文章へ改められる過程で、内容に変化が生じるケースがあることを指摘した。以上、第2章の考察によって、『寛永系図』編纂事業の実態について、従来不明であった編纂過程の細部について解明し、研究を深化させることができた。

第3章では、『貞享書上』の提出をめぐる諸家の動向ならびに『貞享書上』が有する史料性格について論じた。第3章第1節では、『貞享書上』の成立過程、関連法令、『譜牒余録』との関係、『譜牒余録』の収録家について考察した。第3章第2節では、諸家の動向を分析した。事例として、福山藩水野家、加賀藩前田家、村上藩柳原家、仙台藩伊達家、人吉藩相良家等の動きから、書上が作成されていく様子を捉えた。第3章第3節では、書上の体裁について考え、諸家の手によって成立した書上の構成自体が意味を有する資料であることを述べるとともに、具体例として毛利家書上の構成について分析した。以上、第3章では、『貞享書上』提出をめぐる諸家の動向を中心に検討した。本章の最後において、『貞享書上』と近世後期における幕府の歴史編纂事業との関係について述べた。

第4章では、『武徳大成記』編纂の状況と、それ以前に成立した徳川創業史である『松平記』『三河物語』との関係について論じた。第4章第1節では、『武徳大成記』の成立に関して、関連法令、同書の編纂方法上の特徴、徳川創業史の流布状況について考察した。第4章第2節では、『松平記』『三河物語』『武徳大成記』のテキストを比較し、そこにみられる差異を詳細に比較検討した。検討対象としては、①家康の岡崎入城、②信康の自刃、③守山崩れ、の3つの記事を取り上げた。以上、第4章の考察によって、三河出身者によって執筆された、在地色の強い書物である『松平記』や『三河物語』が、幕府編纂の歴史書へと姿を変えていく様子を明らかにした。

第5章では、『寛政譜』編纂に関して、幕府の編纂姿勢や諸家側の動向について検討した。事例として、島原藩松平家を取り上げた。第5章第1節では、『寛政譜』編纂のながれについて、先行して編纂が行われていた『藩翰譜続編』との関係に着目しつつ論じた。第5章第2節では、編纂過程において、幕府および諸家が行った系図の内容を確認する動きについて考えた。第5章第3節では、『寛政譜』所収の島原藩松平家譜の記事が、どのような史料を元に叙述されたかを検討した。あわせて、その叙述にみられる特徴について述べた。以上、第5章の考察により、『寛政譜』の最終稿が成立する過程を詳細に解明す

ることができた。最後に『寛政譜』が後世に与えた影響について論じた。

第6章では、近世に成立した家譜史料が有する性質について分析した。事例として、伊奈家を取り上げ、伊奈忠次という人物が、子孫によってどのように表象されたか、その様相を考察した。第6章第1節では、伊奈忠次と伊奈氏について述べた。伊奈忠次の民政方面における功績や、伊奈諸家の家格について論じた。第6章第2節では、忠次像の表象について検討した。①『寛永諸家系図伝』所収「伊奈系図」ならびに「先祖覚」、②寛文十三年伊奈忠常建立碑、③『諸家系譜』所収「伊奈系譜」の3点の史料を分析の対象とした。以上、第6章の考察により、家譜史料の作成主体がおかれた歴史的状況、ならびに作成主体と対象との関係性によって、家譜史料における叙述内容が変容していく様子を明らかにした。

第7章では、江戸幕府によってあしかけ23年の歳月をかけて編纂された『朝野旧聞哀藁』について、その史料性格を分析した。第7章第1節では、近世後期、多くの編纂事業を主導した林述斎について、彼の経歴や歴史編纂に対する考え方に関する検討を行った。第7章第2節では、『朝野旧聞哀藁』の編纂方法とその特徴について考えた。編纂者が読み手との知的営みの共有を重んじている点を論じた。第7章第3節では、『朝野旧聞哀藁』における考証の実態に関し、永禄年間の記事を取り上げて考察した。同書の優れている点ならびに限界について考えた。第7章第4節では、歴史叙述と政治上の配慮に関する問題を取り扱った。『朝野旧聞哀藁』の柔軟な編纂方法が政治上の機微に触れることを容易にしている点を指摘した。以上、『朝野旧聞哀藁』編纂に関する諸様相について考察するとともに、編纂を主導した述斎が直面した課題は、政治と学問とを両立させることにあったと推測した。

補論では、鳥取藩家老鵜殿長春による家史編纂の動きについて検討した。長春は、17世紀末から18世紀前半にかけて、一族の歴史書である『鵜殿家史』をまとめたが、その際にみられた知的営みについて詳細に述べた。補論第1節では、『鵜殿家史』の構成と鵜殿長春ならびに鵜殿氏について論じた。また、鳥取藩の家臣としての鵜殿家の地位に着目した。補論第2節では、『鵜殿家史』に用いられている史料について考えた。それらの入手状況や、長春の史料に対する吟味のあり方を述べた。補論第3節では、長春が三河西郡の寺院長存寺の協力を得て、徳川家や池田家に連なる由緒を新たに構築していく動きを詳細に捉えた。以上、補論における考察を通じ、18世紀において家史を編纂するという行為の実態について、徳川家との由緒を有する家を事例として取り上げ、明らかにした。

終章では、上記の研究成果をふまえて、解明した事柄について述べた。すなわち、①幕府歴史編纂事業における前期と後期の関係、②関係史料の成立・残存状況、③創業史における歴史叙述の特徴、以上3つの事柄について論じ、本稿の総括とした。また、今後の課題と展望について述べた。